

# タツノオトシゴの仲間

# 水族館へ行こう!

## 京都大学白浜水族館



生きた餌を調達するのに苦労するタツノオトシゴの飼育(水槽番号306)

タツノオトシゴの仲間は水族館の人気者だ。ヨチヨチと泳ぎ、首を伸ばすようなしぐさもかわいらしい。タツノオトシゴの3種、現在はタカ

シゴの仲間は日本で7種が知られ、白浜水族館では近年オオウミウマヤカクラタツ、サンゴタツの3種、現在はタカ

# 人気者の影に飼育員の苦労

49

## 加藤 哲哉

る。

ところで最近、沖縄などでタイバーによって体長1センチほどの小型種らしいものが発見された。既

から赤ちゃんが出てくるシーンは、まさに産んでいっているように見える。白浜水族館でも、雄のヨウジウオを採集して飼育して

などの甲殻類を食べているようだが、これらを海で採集するのは難しい。このため白浜水族館では川エビを餌と与えている。主にミノソレヌマエビなどで、時期にもよるが、ちょうど口に入るサイズであるし、海水

知の大型種の子でもないことが確認されれば、近く日本産タツノオトシゴの一種に加えられるかもしれない。

タツノオトシゴはヨウ

いたところ、ある朝水槽が体長1センチくらいの赤ちゃんでいっぱいになったことがある。採集した時すでにおなかで卵を育てていたわけだ。

中でもしばしばは生きて喜んで食べてくれるのはいいのだが、たった数匹のタツノオトシゴのために飼育員は月数回、川でエビを捕らなければならぬ。しかも台風の後など川が増水しエビが捕れなくなったりすると、タツノオトシゴの餌が切れるのではないかと冷や汗をかいたのである。

シウオの仲間である。これらの仲間の極め付きの特徴は、雄が赤ちゃんを産むことだろう。

タツノオトシゴはできるだけいつも展示するようになっているが、この魚の飼育には他の魚にない手間がかかる。というのも、彼らはちょうど口に入る大きさの生きた餌しか食べてくれない。海中

では、小さなエビやアミ

本当に子どもを産むわけはないが、雌が産んだ卵を雄がおなかの表面か袋の中で保育するのだ。ふ化して雄のおなかの袋

では、小さなエビやアミ

では、小さなエビやアミ

(京都大学技術職員)